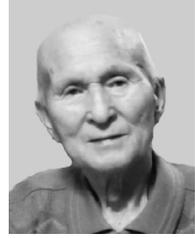


## 広島の惨状を忘れまい

辻口 清吉（当時21歳）  
札幌市



[私は昭和19年徴兵検査で甲種合格となり、20年3月2日、青年学校5年在学中に船舶兵として愛媛県伊予三島町暁第2940部隊に入隊、軍務は陸軍潜艇マルユとよばれる輸送艇の乗船訓練だった。敵の制海制空権のもと、暗夜に乗じてこの船で南海の島々に物資の補給輸送を続けるのである。出航の時は部隊全員白い作業帽を振って見送ったが、船は二度と帰らなかった。マルユが無失になったので、6月19日広島市宇品町暁1640部隊第4中隊第2班、班長川上次郎に転属した。ここでは㊦という陸軍の海上特攻兵器で訓練した。㊦は120キロの爆雷を2個装着し、薄いベニヤ板、底板は4ミリを2枚、側板は63ミリ、甲板は4ミリ、1人乗りの粗末な舟である。夜間奇襲により敵の艦船に肉薄攻撃するという訓練をしていた。私は生きて帰れないことを思い、7月の日曜日に広島市内スミレ写真館で写真を撮って家に送ってもらった。－以上、未英訳分]

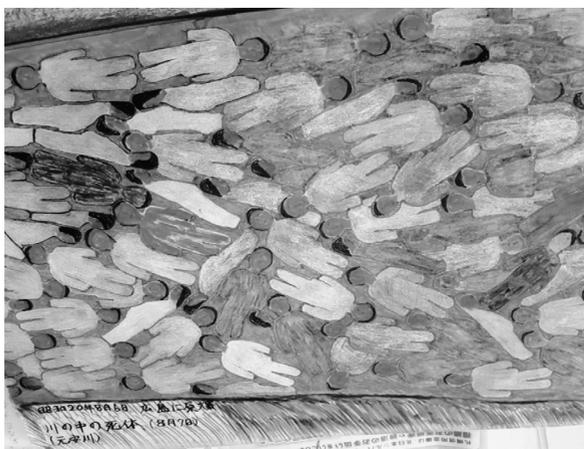
8月6日、私は広島市宇品の陸軍暁部隊にいて、船舶工作場前で被爆した。突然、ピカッ、ドーンと物すごい大音響とともに強烈な光の直射と熱風を感じ、頬が震えた。投げつけられるようにして地面に伏した。爆風が去った後立ちあがって見上げると、広島は黒煙の中に火の玉が空を覆い尽くしていた。

午後3時に出動命令が出て広島城近くの練兵場にむけて出発した。広島に近づくとたくさんの人々が両手を前に突き出して裸同然でさまよい、郊外に逃れて来る。市内に入っていくとあたりには真っ黒に焼け焦げた死体が数え切れないほど散乱していた。人の焼け焦げるにおいと物体の焼ける煙などで息苦しくて倒れそうだった。どす黒く焼けただれ、血だるまになった人々が無残な姿で運ばれ、生き地獄ともいうべき惨状

を呈していた。次第にあたりが暗くなり、舞い狂う炎の中から女の人や子どもたちの救助を求め泣き叫ぶ悲痛な声が聞こえてきたがどうすることもできなかった。

翌朝から負傷者の救護と死体の収容作業を行った。身元を確認し、貴重品は外して死体を積み上げて油をかけ、全員で念仏を唱えながら火葬した。燃えてくるとパンパンと音を立てながら焼けていった。火葬にしている間に、元安川の縁に数知れないほど穴を掘り、遺骨を埋葬し続けた。その時も川面には一面に死体が浮いていた。軍施設が集中していた広島城は爆心地から1キロメートル、あちこちに兵隊の死体が山のようになっている。死体の収容は苛酷であった。炎天下なので死体は腐敗し、ブクブクに膨れている。収容するのに腕や足を持つとちぎれてくる。素手で収容作業をしていたが顔や手を何日も洗うことができなかった。とりわけ、つぶれた防空壕の中に赤ちゃんを背負った若い母子が泥水の中に埋もれて死んでいた光景、電車の中で焼かれ骨だけが残っていた光景は、忘れようにも忘れることができない。

8月9日にソ連が対日参戦をした。隊長から満州へ行くと言われ私も死を覚悟したが、8月15日に終戦となり、9月13日には故郷に帰った。その時は身体に異常はなかったが、やがて下痢と発熱が1カ月程も続いた。それはまもなく治まったが、翌年8月前後になると身体がだるくなり、脱毛と歯茎からの出血が2カ月も続いた。1959年頃からまた体調が悪くなり、鼻血と歯茎の出血に悩まされた。1960年に被爆者手帳を申請して翌年受け取っ



元安川の中の死体（8月7日）辻口家提供

だが、その後高血圧、メニエール病、変形性脊椎症、胃がん、腎不全、腰椎圧迫骨折、日光角化症、腰部脊柱管狭窄症、大動脈狭窄、脳梗塞などありとあらゆる病気を患い、現在も胃潰瘍と慢性胃炎、そして1日おきに人工透析をしている。

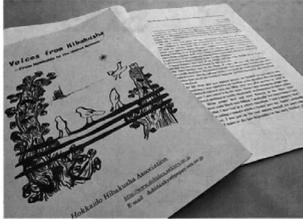
娘も血圧がおかしい、私の被爆と関係あるのではないかと診断され、5歳くらいから3年ほど札幌医大に通った。いまでも体調はよくない。それまで元気だった長男は、2004年、59歳の時ガンで亡くなった。

広島の惨状、救助を求め泣き叫ぶ人々の声、水、水がほしいの音が耳の奥にこびりついている。戦争は実に悲惨なものである。私たちは戦争の愚かさ、恐ろしさ、むごさを語り伝えなければならない。一生忘れることのできない原爆の体験を、広く世の人々に知ってほしい。戦争の記憶を伝え残したい。憲法9条を守り、核兵器を廃絶し、戦争のない平和な世界であってほしいと願っている。

一辻口さんは2015年10月29日に逝去されました。(編集委員会)

# 何百年たっても忘れない

# 「原爆の実相」世界へ



道内被爆者21人の手記を英語に翻訳した冊子

道内の被爆者でつくる北海道被爆者協会、越智晴子会長、札幌）が今年、会員から募った手記を英語に翻訳し冊子にし、海外の外交官に読んでもらう活動を独自に続けている。被爆者の体験やメッセージを世界に発信することが、核廃絶への近道になると考えた。21人が手記をつづった。6日で広島への原爆投下から70年。核廃絶の到達点はお見通せないが、被爆者たちは「いつか自分たちの思いが世界に届くはず」と信じる。

（報道センター 細川伸哉） ■関連記事4面

「Voices from Hibakusha」（被爆者は訴える）」と題された英語の手記集は、同協会が今春、道内約360人の被爆者から手記を募り、ボランティアが翻訳。日本語版もある。今年4〜5月、ニューヨークで開かれた核拡散防止条約（NPT）II 社会面との「再検討会議」の会場、道内の被爆者が出席者に配った。さらに7月、153のすべての在日外国公館に送付した。広島で被爆した札幌市北區の新見静男さん（80）は、あの日の体験を鮮明に語った。△爆音に気がつき、空を見上げた瞬間。全身がもすこい熱さに包まれ、アチアチ、アツイヨイ、助ケテ、助ケテと何度もじんだんだを踏みました。手足の皮膚が溶けてぶ

## 道被爆者協 21人の手記英訳



全身やけどを風を引き取った男の子を自ら描いた絵を手にする辻口清吉さん。入院先の病院で取材に応じてくれた

らさがり、顔の右半分にかけてを負った。傷痕は加齢とともに目立たなくなったが、今も痛々しい。家族5人のうち姉と父が命を奪った。体験を多くの人に伝えたいとの思いは強い。だが「被爆以来、街に出れば小さな子に奇異な目で見られてきた。人前で証言するのは引け目がある」。米国ではキノコ

る。妻綾子さん（77）が「姿を見てもらうだけで、原爆の恐ろしさを分かっただけでいいんじゃない」と背中を押してくれるが、一歩が踏み出せない。その分、ベンを通じて素直な願いを世界に訴えたい。△戦争は二度と起こしてはなりません。そして核兵器は絶対に必要ありません。同協会の北明・邦雄事務局次長（67）は、手記の英語化について「世界的外交官やリーダーに原爆の実相を知ってもらいたかった」と狙いを語る。米国ではキノコ

雲の下で起きたことを知る人は多くないとされる。潘基文国連事務総長は2010年8月6日、広島の平和記念式典で核兵器のない世界に向け、「被爆者の証言を翻訳することを、直接体験を語り続けなければならぬ」と訴えた。手記などの英語化は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（広島市）が進めているが、同館が所蔵する約13万5千点の手記のうち英語に翻訳されたのは347点。同館は「北海道の取り組みは貴重だ」と語る。陸軍兵士だった札幌市東區の辻口清吉さん（91）は、救護所に収容された6歳くらいの男の子を忘れられない。全身にやけどを負い、目も見えなかった。「水が欲しい」と言うので、辻口さんが自分の水筒の水を飲ませると息を引き取った。△女の人や子どもたちの悲痛な声が聞こえたが、どうすることもできなかった。△もともと筆まめな辻口さんだが、7月、脳梗塞になり、利き手の右手が思うように動かなくなった。「70年たっても忘れない。何百年たっても忘れない。まだまだ書き尽くしていないことがあるんだが……」と悔しそうに言った。

『北海道新聞』2015年8月6日付